

プロジェクト研究3『子どものウェルビーイングを促進する心理教育的アプローチ』

(1年目)

担当：飯田順子（附属学校教育局）・田中裕子（附属学校教育局）

【構成】

附属学校教育局 2名、附属中学校 2名、附属高校 2名、附属聴覚特別支援学校 3名、
附属桐が丘特別支援学校 2名、学外関係者 1名

【研究の趣旨と目的、研究の経過】

不登校やいじめの増加など、子どものメンタルヘルスを取り巻く状況が深刻化する中、問題に焦点を当て改善を目指すアプローチと同時に、子どもの生活の充実感や満足感に焦点を当てた新しい教育のフレームワークが登場している。その中の中心的な考え方の1つに、“子どものウェルビーイング”がある。2023年に閣議決定された第4期教育振興基本計画においても、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」がコンセプトとして掲げられている。このプロジェクトでは、子どものウェルビーイングをどのようにとらえ、どのように高めていくかということをも、“ポジティブ心理学”の枠組みで行われている研究や実践を学び、学校への適用方法の検討や共同研究を進めていくことを目指す。

今年度はプロジェクト1年目として、下記の日程で学校におけるポジティブ心理学の活用についてや、ポジティブ心理学の代表的な概念の1つ「パッション」について学び、意見交換を行った。

・令和6年10月23日 第1回プロジェクトミーティング実施

「ソーシャル・エモーショナル・ヘルス・サーベイ（SEHS）を用いた学校全体メンタルヘルススクリーニング」飯田順子

飯田氏より、資料を基に、子どものウェルビーイングを促進する心理教育的アプローチと、「学校全体メンタルヘルススクリーニング」の必要性および実施方法について説明がなされた。メンタルヘルスの問題が子どもや青少年に大きな影響を与え、発達のさまざまな側面に影響を及ぼすことが指摘されている。また、アメリカで使用されている「ソーシャル・エモーショナル・ヘルス・サーベイ（SEHS）」についても紹介され、その中核概念である「Covitality（共起性）」がポジティブな心理的強みを相乗効果として捉える重要性が強調された。ミーティングの後半では、前半の発表を踏まえディスカッションが行われ、附属学校でこの調査を展開する可能性や、子どものポジティブな側面に目を向ける関わりの重要性が共有された。

・令和7年1月17日 第2回プロジェクトミーティング開催

ミニレクチャー「子どものウェルビーイングとパッション」久保尊洋

久保氏から、資料を基に、子どものウェルビーイングとパッションについて説明がなされ

た。ウェルビーイングは幸福や自己実現と関係し、基本的心理欲求（自律性・有能感・関係性）の充足が重要とされる。また、パッションには「調和性パッション」と「強迫性パッション」の2種類があり、前者はウェルビーイングを促進し、後者は阻害する可能性がある。ウェルビーイングの向上には、パッションを認め、基本的心理欲求を支援する環境が重要であり、現場での児童生徒との関わり方について提言が示された。ミーティングの後半では、前半の発表を踏まえてディスカッションが行われ、自殺の少ない町の研究が印象的だったことや、それぞれの学校における子どものウェルビーイングの状況について、学級の風土と子どものウェルビーイングの関係性などについて意見を共有した。

【令和6年度において得られた成果】

- ・子どものウェルビーイングに関連するいくつかの概念について、研究の動向や現場での応用について理解を深めることができた。
- ・SEHSを用いたメンタルヘルスクリーニングについての共通理解が得られ、附属学校における今後の展開について検討することができた。

【令和7年度に向けた課題】

- ・SEHSを用いたメンタルヘルスクリーニングを実際にいくつかの学校で実施し、その利用可能性について検討するとともに、研究成果を発信する。
- ・ウェルビーイングを促進する“心理教育”の内容について理解を深め、それぞれの附属学校での展開を検討する。